

1922年のポンティニー旬日懇話会：ジッドのポール・デジャルダン宛未刊書簡

吉井, 亮雄
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/10029>

出版情報：Stella. 19, pp.127-140, 2000-09-05. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

1922年のポンティニー旬日懇話会

—— ジッドのポール・デジャルダン宛未刊書簡 ——

吉井亮雄

毎年初夏から秋口にかけてノルマンディーのスリジー＝ラ＝サルで開催される国際コロックの前身が、戦前にポール・デジャルダンの主宰した「ポンティニー旬日懇話会」であることはよく知られている。1859年にパリで生まれたデジャルダンは文学の教授資格を取得後、コンドルセなどいくつかのリセやセーヴルの女子高等師範学校で教鞭をとるが、同時に道徳や社会問題への関心が強く、1892年には「道徳的行動のための同盟」（のちに「真理のための同盟」と改称）を結成し穏健な運動をつづけた。1906年にヨヌヌ県ポンティニーの古い僧院を買いとったのを機に、ここを舞台に10日間の懇話会を毎夏いくつか催そうと決意し、4年後にそれを実行に移したのである。おおむね一夏に3つの集いが開かれ、その主題は多岐にわたったが、参加メンバーは大学関係者がめだつ現在のスリジーとはちがって作家や思想家・批評家などが多くを占めていた。とりわけジッドら「新フランス評論」グループとは、初年度から「現代詩」にかんする懇話会の企画を委ねるなど、つねに緊密な連携関係を保った。デジャルダンの活動は、第1次大戦による8年間の中断をはさんで、彼が80歳で没する前年（1939年）までつづき、その間つごう70の懇話会が開かれている。国際的な文化交流に尽くした彼の功績は高く評価され、30年代には高等師範学校で同期だったベルクソンを中心としてノーベル平和賞に推す動きがあったほどである。

この懇話会にかんし最もよく参照される文献は、デジャルダンの長女が編纂した『ポール・デジャルダンとポンティニー旬日懇話会』（1964年）である。研究者らによる論考にくわえ、同時代の証言や未刊資料を収載したもので、懇話会の全体像を知るには好個の一書といえよう。いっぽう通史的な研究として最近出版されたのがフランソワ・ショーベによる同名の著書だ。ショーベは

20世紀の思想史・文化史を専門とするだけあって、さまざまな図書館やアルシーヴに保管される関連資料を渉猟したうえで、ポンティニーに集った知識人たちの群像を年代を追いながら巧みな筆致で描いている¹⁾。だがもちろんこれら2著によってすべてが論じつくされたわけではなく、多様な具体相についてはむしろ時期や題材を限定した個別的アプローチに俟つところが大きい。

本稿ではポンティニーにかかわるジッド書簡1通を若干の補説をまじえて紹介したい。「1922年7月21日」の日付をもつこの書簡は、10年ほど前にパリで競売に付されるまでは長らく未確認だったもので、活字化はむしろ今回が初めてである。物質的な側面から述べれば、作家が愛用したイタリア・ポレリ社製の漉き入れ紙2葉（二折用紙と、これを半分に切り分けたもの）からなり、表裏計6頁の全面を黒色インクによる文字列が埋める。ジッドの書簡として記述量は多いほうだろう。封筒は残っておらず、また書状じたいにも受け手の名は明記されていないが、内容から見てポール・デジャルダン宛であるのは確実だ。さらに付言すれば、本文末尾に「デジャルダン夫人によろしく」とあるのは、わが国ならば「奥様によろしく」と結ぶところの定型表現で、この点からも名宛人の同定にかんして疑念の入る余地はない。

同書簡の資料的価値は以下の理由から明白である。まずはその希少性。ジッド＝デジャルダン往復書簡のうち、デジャルダン筆は計16通がジャック・ドゥーセ図書館に現蔵されるが、いっぽうジッドのものはわずかに3通の存在が確認されているにすぎない。この著しい不均衡は第2次大戦のもたらした不幸な事情による。すなわち、およそ60年間にわたりデジャルダンが受けた同時代人からの書簡をはじめ、ポンティニーに保管されていた文書類の多くは1942年にゲシュタポによって押収・略奪され、その大半が今日にいたるまで行方すらも分かっていないのだ。ルナンからレイモン・アロンへとつらなる多数の知識人たちの貴重な記録であっただけにまことに大きな文化的損失だが、少なくとも20前後は存在したはずのジッド書簡もまた同様の運命をたどったのである。したがってここに印刷公表するのは、すでに活字化された他の2書簡とならんで、まさしく例外的に難を逃れた一通なのである²⁾。

記述内容の点でも資料的価値は高い。第1次大戦のために中断していた懇話会の久方ぶりの再開にかんするものだからだ。ちなみにペン・クラブや国際人権擁護連盟、ロマン・ロランの「ヨーロッパ」誌など、文化交流をつうじた国

家間調停の動きが顕在化しはじめるのがちょうどこの時期のことである。微妙な政治状況のもと、デジャルダンたちの活動もまた次第に大きな役割を担っていく。そういった流れのなかで 1922 年の集いのひとつ、「名誉を映すもの——創作による誇りの陶冶」と題された文学懇話会は、コスモポリットな性格を強く謳ったテストケースとして、ポンティニーのその後を方向づけたといってもけっして過言ではない。そしてこの企画の実現にむけてジッドが主導的な役目を果たしたことは書簡の文面からもはっきりと読みとれる。

こういったところをとりあえずの前置きとして、さっそく全文を訳出することにしよう（仏語原文は本稿末尾に掲載）——

1922 年 7 月 21 日

拝略

たった今ジャン・シュランベルジェから、あなたにあれこれの住所を直ちに送られたしとの至急便を受け取りました。私はパリを出る前にあなたにお伝えしたと思こんでいたのです。お会いできないことで大集会の成功を損なう遅延が生じぬよう、とり急ぎお知らせします。

ライナー・マリーア・リルケ 彼はひと月前には次のところに滞在していました。

スイス、ヴァレ県、シェール近郷、シャトー・ド・ミュワ

そこを去ったとしても、新しい住所を残しているはずですよ。

イヴァン・ブーニン 彼の住所は存じませんが、次のところに書けば転送してくれるでしょう。

マダム通り 43 番地、ボサール

ミドルトン・マリー

ブレーズ・デゴッフ通り（レンヌ通り）、ホテル・マジスティック（？）

（〔欄外注〕ホテル名はあまり確信がありませんが、通りにはホテルは 1 軒しかありません。おそらく「ブレーズ・デゴッフ通りのグランドホテル」となさるほうがよいでしょう）

シモン・ビュッシー夫人

ロンドン、ゴードン・スクエア 51 番地、レディー・ストレイチャー方

ブーニン氏（と夫人）、ミドルトン・マリー（と夫人）、ビュッシー夫人——彼らははっきり受諾しました。つまり、予定どおりに参加を要請し明確な日時を知らせくださる、あなたからの確認のご返事を待つばかりなのです。ブーニンには「招待客」(not paying guest) だと思ってもらってよいと言いました（あるいは人を介してそう伝えました）。

リルケも同様ですが、彼はまだ確答はしていません。彼が受けるかどうかは、クルティウスの対応とならんで、プログラムがどう修正されるかにかかっています。

ジャルーもはっきりとした返事はしていません。とても承諾したそうにしている、もういちど私に手紙をくれるはずだったので。せっついてみるのがよいでしょう。住所はヴァロワ通りですが……今ではもう番地がわかりません。彼の版元（いくつかある版元のひとつ）が転送してくれるでしょう。いずれにせよジャルー夫人のほうは参加できないとのことでした。

私は1週間前にマルタン・デュ・ガール家を辞しました。ロジェ・マルタン・デュ・ガールは参加するつもりにしていました。ですが、彼にも（セヌヌ＝エ＝マルヌ県、ムラン近郷、ル・メー）また他の人たちにも、はっきりした最終的な招待状を送るのがよいでしょう。

私に代ってジャン・シュランベルジュが、マイリッシュ夫人とマリー・デルクール嬢もまたこの最終的な招待をお待ちしていることを再度申しあげたことと思います。そして私自身も、すべての参加予定者と同じく、あなたがわれわれを迎えてくださる正確な日時を決めていただければと存じます。

ヴァン・リセルベルグ夫人とヴァン・リセルベルグ嬢——いま私は彼女たちのところ（ヴァール県、ブリニョル、バステッド・フランコ）に滞在しているのですが、パリで申しあげたように、彼女たちも喜んで参加いたします。彼女たちの出席は人間関係のつなぎ役としてたいへん望ましく思われます（変な文章で失礼）。

最近受けとったゴールズワージーの手紙にはいささか驚きました。彼は「ロンドンかパリで」私に会いたいと述べているのです……。彼の参加は未定なのでしょう。私はすっかり了解済みのことと思っていたのですが……。

「新フランス評論」は誤ってベネットとリットン・ストレイチーの出席を予告してしまいました。しかし彼らがふたりとも辞退したことは申しあげましたね。

さようなら。また近々、そうあなたに申しあげられるとはなんと喜ばしいことでしょう。デジャルダン夫人によるしくお伝えくださいますよう。敬具

アンドレ・ジッド

おそらくすでにチボーデは、もし可能であり不法なふるまいでないならば、われわれのほうの会を少しばかり楽しむために、第3懇話会の始まる2日前にポンティニーに到着したい旨を申しあげたことでしょう。

参加予定者の連絡先や彼らの返答・反応をつたえ主宰者からの最終的な招待状の送付を促す内容だが、その対象としてはフランスをはじめヨーロッパ主要国の著名文学者の名前が綺羅星のごとく並んでいる。では実際には誰が参加し、誰が欠席したのか。後者のばあい辞退の理由はなにか。また参加者のあい

だではどのような交流がおこなわれたのか……。書状冒頭で言及されるシュランベルジュからの「至急便」や、ゴールズワージーのジッド宛をはじめ、かなりの関連資料が未発見のため不明な点も少なくないが、まずはジッド自身の事後の証言を読もう。彼は9月3日の『日記』で懇話会をふりかえり、次のように総括しているのだ――

ボンティニーでの旬日懇話会――8月14日から24日まで。私が参加するのはこれで4度目だが、最も興味ぶかい会合のひとつ――そこで話される事柄のためというよりは、さまざまなメンバーがそこで交わり思いがけない関係ができたという点で興味ぶかかったのだ。すばらしいことに私はテオ〔ヴァン・リセルベルグ〕夫人、マイリッシュ夫人、ピュッシー夫人、エリザベート〔ヴァン・リセルベルグ〕、マルタン・デュ・ガール、ジャン・シュランベルジュ、マルク〔アレグレ〕、リヴィエールらに囲まれていた――ジャルマまでが新参として来ていた……。それに祭りの花形シャルリ・デュ・ボスも。〔…〕ポール・デジャルダンのほうでは感じのいいモーロワを招いていた〔…〕。

ド・トラーズ、プレッツォリーニ、ティルロー、そしてクルティウス――彼らはそれぞれスイス、イタリア、オランダ、ドイツを代表していた。ベネット、ブーニン、リットン・ストレイチーの欠席が残念がられていた。――つまり代表の出ている国が少なすぎた。来年はもっと準備をしなければなるまい。だが、はたしてこれ以上に代表的で、これ以上にうまく選ばれたメンバーを集めることができるだろうか。これらの人々にくわえ、立派な〔レオポルド〕ショーヴォー博士、〔ジョルジュ〕ラヴラ氏、高等師範学校の受験準備をしている3人の青年、ストレイチー嬢、洗練されたスコットランドの女性、3人の若い女性教師など――総勢35人であった。³⁾

もっと多くの国々からの参加を得たかったという思いは残るが、同時にこれ以上の人選はそうそうありえないとの自負もまた明らかだ。基本的には結果に大いに満足であり、来年はさらに入念な準備を期せばよい、そういう心づもりと読める。じっさい戦後初の企画であることを思えば、参加国の数は必ずしも少ないとはいえない。まず後段冒頭で名のあがる外国人のうち、エルンスト・ローベルト・クルティウス（後述）をのぞく3人についてはここでふれておこう。ロベール・ド・トラーズは1920年ジャック・シュヌヴィエールとともに「ジュネーヴ評論」を創刊し、1930年の終刊まで編集長をつとめた。汎欧的人道主義を掲げる同誌はとりわけ「新フランス評論」や「ヨーロッパ」と強く連帯した⁴⁾。ジュゼッペ・プレッツォリーニは、ジョヴァンニ・パピーニと「レ

オナルド」誌を共同創刊したイタリアの作家・批評家で、「ジュネーヴ評論」にもしばしば寄稿してイタリアの文学状況を報告している。またヨハネス・ベルナドゥス・ティルローはオランダの批評家で、著書に『モーリス・バレス』『1880年以降のフランス文学』などがある。彼らにくわえ、フランス在住とはいえベルギー人のマリア・ヴァン・リセルベルグと娘エリザベート（ちなみに彼女はまさにこの夏ジッドの子カトリーヌを宿す）、ルクセンブルク大公国のエミール・マイリッシュ夫人（アリース、通称ルー）、欠席したイギリス人伝記作家リットン・ストレイチーの2人の実姉ドロシー・ビュッシー（フランス人画家シモンの妻で、のちにジッド作品数点を英訳）とジョン・パーネル・ストレイチーがそれぞれの母国を代表すると考えれば、近隣のヨーロッパ諸国からは合わせて7カ国の参加があったのである。

なかでもとりわけドイツの参加は懇話会の成功に不可欠であると早くから考えられていた。敗戦国への制裁を強硬に要求し国際連盟の協調路線を激しく攻撃するシャルル・モーラスらアクション・フランセーズの「全一国家主義」^{ナショナリズム・アンテグラル}、またロマン・ロランの離脱後、やはりヴェルサイユ講和を批判してボルシェヴィズムへ傾斜するクラルテ派のインタナショナルイズム、これら左右いずれの陣営とも距離をおいてリベラリズムの旗をかかげたのが「新フランス評論」グループであり、デジャルダンら「真理のための同盟」であったからだ。彼らにとって「精神のヨーロッパ」という理念のもと、知的にも道徳的にも良識あるコスモポリタニズムをめざすには、戦争で途絶えた交流を再開することがまずなによりも急務だったのである。そのために選ばれた「現時点で最も望ましいドイツ人トリオ」⁵⁾が、リルケ（正しくはオーストリア人）、クルティウス、そしてジッド書簡には名が出ないが、哲学者のベルンハルト・グレットウイゼン（フランス風の読みではベルナル・グレチュイゼン）であった。

ジッドとリルケとの関係は互いに尊敬しあう作家どうしのそれであった。戦前にはジッドが『マルテの手記』の抜粋をフランス語に、リルケが『放蕩息子の帰宅』をドイツ語に訳し、とくに後者の場合は精確を期すため著者に面談を求めたほどこの仕事に力を注いだ。そのリルケも大戦勃発とともにフランスを離れざるをえなくなるが、彼がパリのアパルトマンに残した家財が差し押さえられ競売によって四散したさい、ジッドは本人の安否を気づかないながら、失われた品々を求めて奔走している（ただし相当量の原稿類をはじめ、なにひとつ

見つからずに終わった)。6年以上も途絶えていた文通が復活するのはようやく1920年末になってのこと。当然のことながらジッドは戦後初の懇話会に呼ぶべき外国人の筆頭にリルケをあげ、経済的な負担のない「招待客」として参加を要請する。リルケのほうも当初はこの誘いに心ひかれたようだが、しかし結局は「家庭の事情」によるウィーン行きを理由に辞退するのである。また不参加の一因には、けっして社交的とはいえぬ彼の性格もあったのかもしれない。じじつ断りの手紙には次のような一節が認められる——「10日間の交わり！私のはろまなので、〔たとえ出席したとしても〕おそらく場に溶け込めるのはいざ閉会というころになってでしょう⁶⁾」。先の『日記』の記述にとどまらず、ジッドが懇話会の後ではリルケの欠席に言及することがないのは、そういった成り行きをある程度予想していたためなのや否や⁷⁾。

グレットゥイゼンは、オランダ人を父にロシア人を母にもち、自らはドイツ市民として教育を受けた。母国語に劣らぬ完璧なフランス語をあやつり、早くも終戦の翌々年にはデュ・ボスの推薦で「新フランス評論」の定期的寄稿者に迎えられていたが、1924年に初めて懇話会に加わるや、ポンティニーの歴史のなかでも最も輝かしいメンバーのひとりとして仏独間の橋渡し役をつとめることになる（さらに1934年にはヒトラー治下のドイツを去ってパリに定住、ガリマール書店の有力なスタッフとして「イデー叢書」の企画・編集などにあたった）。そういった前後の経緯から見ても、彼のばあい国籍ゆえに躊躇したとは考えにくい、なぜかこの年は不参加に終わる。かくして期待された「トリオ」のうち、はや2人のフランコフィルが欠けてしまった。それだけに残るクルティウスの参加だけは是が非でも実現させなければならない……。

ジッドとクルティウスはすでに前年コルパハのマイリッシュ夫人宅で対面し互いに好感をいだいていた。イデオロギーの面でもクラルテ派のインタナショナルナリズムを否定する点で意見の一致を見る。この交流にもとづき、デジャルダンの依頼を受けたジッドがクルティウスに懇話会への参加をもちかけたのは1922年3月28日のことであった——

小さなパンフレットをお送りします。〔…〕ポンティニーの懇話会についてのものです。私たちはあなたの（そしてリルケの）出席を心から願っています。私としてはあなたがわれわれと会うことにあまり関心も喜びももたれぬとは信じられません。一

同心から歓迎することは確実です——それから […] イギリスやスイス、ロシア、イタリア、スカンジナビアなどさまざまな国の人々にお会いになれましょう。われわれはドイツの代表も出席するのだから、この会合はその完全な意義をもたないし、本当に興味ぶかいものにはならないと考えています。 […] ゲルマン人の実際の参加は翌年に延期しようとしていましたが、「新フランス評論」に載ったあなたの論文〔「デア・ノイエ・メルクール」誌掲載の「ドイツ＝フランスの文化の問題」をジッドが自らの論文「フランスとドイツのあいだの知的関連」で大きく紹介・引用したことを指す〕は多くの人々に影響をあたえたので、今ではこれ以上の延期は無益で思慮を欠くとさえ考えるにいたったのです。⁸⁾

クルティウスは4月1日付の手紙でただちに返答する。招聘にたいして強い関心を示しながらも、彼にはひとつだけ気がかりがあった。プログラムの一項に「西欧の自由な国民」の集会と謳われていることだ。この表現からはドイツの許容あるいは排除にかんし決定権をもつ戦勝国側の集会と解される。必然的に自分はその一員たることはできない……。だがクルティウスは同時に、この問題は「ことば使い」に起因するもので解決は可能であろうと述べ、ただ次の点について保証を求めるのである。すなわち「絶対不可欠の条件、それはわれわれが知的にも精神的にも完全に平等な立場で出会うこと」⁹⁾。ジッドのデジャルダン宛書簡に「クルティウスが受けるか否かはプログラムの修正次第」とあるのはこういった事情による（なお、ともに名のあがるリルケについては同様の要求をした形跡はない。おそらくはクルティウスの反応を知ってジッドが慎重に事を運ぼうとしていたのであろう）。

ジッドから報告をうけたデジャルダンは、「最初の意図を歪めることにはなる」と留保をつけながらも、プログラムの修正にはすすんで同意する。クルティウスの手紙にうかがわれる「われわれの空気への一種の渴望に心を打たれた」からである——「このような感情をはねつけることは不得策であり、また非人道的でもありません」¹⁰⁾。かくして障碍はとりのぞかれ、予定どおり招きに応じたドイツ人ロマニストを誰もが温かく迎え入れる。クルティウスの感激は大きかった。彼がジッドに宛てた礼状（11月15日付）の一節——

あなたはポンティニー滞在が私にとって意味したすべてをなかなかご理解になれないでしょう。フランスとの接触の再開——それは私にとってきわめて重要なことでした。なんという調和的な、澄明で静かな思い出でしょう！ 私はあそこで勇気と新し

い力を汲み上げました。私は自分が善意と洗練に満たされていると感じました。私を懇話会にお招きくださいましたことを心から感謝しています。私はポンティニーで知り合ったあなたのお友だちと今後も交流をつづけたいと思っております。¹¹⁾

さらにクルティウスは、交流の喜びをただ個人的なレベルだけにとどめぬよう、「デア・ノイエ・メルクール」誌に「ポンティニー」と題する一文を発表してデジャルダンたちの活動を紹介している¹²⁾。

さて、ドイツのほかにはイギリスとロシア（ソヴィエト）、ルクセンブルクについてごく簡略にふれるにとどめよう。まずイギリスについて——。この国からは戦前にもジッドを介してエドモンド・ゴスが招かれており、ポンティニーとの縁には浅からぬものがあった。今回のメンバー選びも、1918年のイギリス滞在によっていっそう人脈を広げたジッドを中心にすすめられている¹³⁾。すでに名前のがあった面々のほかに、H-G・ウェルズ（デジャルダンが交渉）やジョゼフ・コンラッド、またデュ・ボスの提案でアメリカ出身の作家・英語学者ローガン・ピアソール・スミスなどにも声かけられたようだ。しかし、あらかじめ応諾していた批評家ジョン・ミドルトン・マリーと妻のキャサリン・マンズフィールドをはじめ、いずれもが結局は不参加（ヨットでの周航が夏期の最優先事だったアーノルド・ベネットをのぞいては個々の理由は残念ながら不詳である）。そのなかでも、2人の実姉が出席したとはいえ、才能・著名度ともに絶頂期にあったリットン・ストレイチーの不在はとりわけ悔やまれた。彼にたいする期待がいかに大きかったかは「新フランス評論」（1922年7月号）が参加予定者のなかにその名をあげていたことからもうかがい知れよう。それだけに翌年ストレイチーのポンティニー来訪が確実になるや、ジッドは次のように喜びとある種の畏れを語っている——「彼に会えると思うとひどく興奮し不安になる。彼はわれわれのことをバカだと思うだろう」¹⁴⁾。悲しいかなこの予想は大きく外れることはなかった。食事や宿泊施設への不満が本当の原因だったらしいが、議論にもほとんど加わらず「優美で丁重な軽蔑」¹⁵⁾をもって臨むイギリス人作家の態度に参加者たちの落胆は小さくなかったのである。

ロシア人代表としては革命後フランスに亡命した作家イヴァン・アレクセエヴィチ・ブーニンに期待が寄せられていたが、確約していたはずの彼もまた不

参加に終わった。だがロシア人へのアプローチは以後もフランス在住者にしばって続けられ、翌年はレフ・シュストフを呼ぶのに成功している。やはり革命後パリに亡命していたこの実存主義哲学者の招聘は、その友人でロシアの血をひく批評家・翻訳家ボリス・ド・シュレゼールの仲介によるものであった。シュレゼールは1921年以降「新フランス評論」の定期的寄稿者であったから、この人選もまたジッド・グループの発案によると見てよからう。

ルクセンブルクを代表したのは言うまでもなくアリーヌ・マイリッシュだが、この富豪夫人が主宰した「コルパパ・サークル」には前述のグレットゥイゼンやクルティウスが含まれる。後にヘレニストとして名を馳せるベルギー人女性マリー・デルクールは結局この年は懇話会を欠席したが（初参加は1926年）、彼女もまた同じグループの一員である。マイリッシュ夫妻の居住するコルパハの館は、ポンティニーとならぶ「未来のヨーロッパの小さな核」（デジャルダンの表現）として多くの文化人を集めた。実際面では、ポンティニーが国際連盟という政治司法機構に希望を託したのにたいし、コルパパは経済的団結の実現を目指したという違いはあるものの、理念においては積極的な相互協力によってしか存続しえぬポリフォニックなヨーロッパという共通の認識に立っていた。したがって両グループの構成メンバーはしばしば重複するが、交流はコルパハのほうがいっそう打ち解けた雰囲気でおこなわれた。議論のための特定のプログラムはいっさいなく、広大な館のこととて招待客の人数制限も無きにひとしかった。アリーヌ自身は文学を深く愛し、親友のマリア・ヴァン・リセルベルグを介してジッドやシュランベルジェらと近しく交わり、「新フランス評論」にも戦前から寄稿している（たとえば前述のジッド訳『マルテの手記』抜粋のための解題）。コルパパについてはすでに同時代人による証言集があるが、最近アリーヌとシュランベルジェの往復書簡集が公刊されたのを機に今後はこのグループにかんしても研究が進むものと期待される¹⁶⁾。

*

以上、ジッド書簡の理解をたすけるために、そこに記載された外国人とポンティニーの関わりを中心に最低限の補説をこころみた。なお懇話会の具体的な議論については公式の記録はなく、不明な点ばかりといってもけっして過言で

はない。数少ない証言のひとつにデュ・ボスの『日記』があるが、これとてもきわめて限定された報告にとどまる¹⁷⁾。本稿が議論の内容にふれなかったのはそういった物理的な制約によるが、しかしこのことは懇話会の本質を反映した当然の帰結ともいえよう。じっさい、ややもすると過密なプログラムに沿って研究発表と討論がくり返され、事後には分厚いアクトが出版される今日のスリジーとはちがひ、発表は午後のひとつだけ、それ以外の時間は周辺の散策や図書室での読書、そしてなによりも自由な歓談についやされたポンティニーの成果は、むしろ参加者各人の心のなかに静かに蓄積するような性質のものであった。1922年の集いをふり返りながら、いみじくもジッドが述べたように、「そこで話される事柄のためというよりは、さまざまなメンバーがそこで交わり思いがけない関係ができたという点で興味ぶかかった」のである。

註

- 1) Voir *Paul Desjardins et les Décades de Pontigny. Études, témoignages et documents inédits*, présentés par Anne HEURGON-DESJARDINS. Paris: PUF, 1964, XII-416 pp.; François CHAUBET, *Paul Desjardins et les Décades de Pontigny*, Villeneuve-d'Ascq (Nord): Presses Universitaires du Septentrion, coll. «Histoire et civilisations», 2000, 328 pp.
- 2) すでに活字化されているのは1908年6月20日付と1926年7月2日付。いずれも記述量は少なく、とりわけ前者はわずか数行の短信である。レフェランスは以下のとおり——*Paul Desjardins et les Décades de Pontigny*, éd. Anne HEURGON-DESJARDINS, op. cit., p. 340; *Lettres de Charles Du Bos et réponses de André Gide*, Paris: Corrêa, 1950, pp. 107-108. ちなみに、現在までに存在が確認されたジッド宛デジャルダン書簡のなかで、本稿が印刷公表するジッド書簡と時期的に近接するのは1922年4月22日付のものだけ(後註10参照)。
- 3) André GIDE, *Journal, I. 1887-1925*. Édition établie, présentée et annotée par Éric MARTY, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, pp. 1187-1188.
- 4) 「ジュネーヴ評論」の詳細については以下を参照——Jean-Pierre MEYLAN, *La Revue de Genève, miroir des lettres européennes, 1920-1930*, Genève: Droz, 1969, 525 pp.
- 5) シャルル・デュ・ボスの表現。 *Lettres de Charles Du Bos et réponses de André Gide*, op. cit., p. 44.

- 6) Rainer Maria RILKE – André GIDE, *Correspondance 1909–1926*. Introduction et commentaires par Renée LANG. Paris: Corrêa, 1952, p. 195.
- 7) ただしリルケは翌1923年には懇話会への出席の意向を示していたらしい (voir *ibid.*, pp. 216–217)。だが夏にはスイス・シェネックのサナトリウムに入院のため、またもや欠席。さらに1924年にもジッドからの誘いがあったがこれも不首尾に終わり (voir *ibid.*, pp. 234–235), 結局リルケは一度もポンティニーに参加することなく1926年に病没する。
- 8) *Deutsch–französische Gespräche 1920–1950. La Correspondance de Ernst Robert Curtius avec André Gide, Charles Du Bos et Valéry Larbaud*, éditée par Herbert et Jane M. DIECKMANN, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1980, p. 55.
- 9) *Ibid.*, p. 57.
- 10) 1922年4月22日付のジッド宛デジャルダン書簡 (*ibid.*, p. 181)。なお、すでに述べたように、これに先立つジッドのデジャルダン宛は未発見。
- 11) *Ibid.*, p. 62.
- 12) Voir Ernst Robert CURTIUS, «Pontigny», *Der Neue Merkur*, novembre 1922, pp. 419–425.
- 13) マルク・アレグレを同伴したこのイギリス滞在については以下を参照——David STEEL, «Escape and Aftermath: Gide in Cambridge 1918», *The Yearbook of English Studies*, vol. 15, 1985, pp. 125–159 (trad. française: «Gide à Cambridge, 1918», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 116, janvier 2000, pp. 11–74).
- 14) *Correspondance André Gide – Dorothy Bussy, I. Juin 1918 – Décembre 1924*. Édition établie et présentée par Jean LAMBERT, Paris: Gallimard, *Cahiers André Gide* 9, 1979.
- 15) André MAUROIS, «Lytton Strachey», *Marianne*, 9 novembre 1932, p. 4.
- 16) Voir *Colpach*, Luxembourg: Édité par un groupe d'Amis de Colpach, Impr. de la Cour Victor Buck, 1957, 228 pp. (éd. revue et augmentée, en 1978, 292 pp.); Aline MAYRISCH – Jean SCHLUMBERGER, *Correspondance 1907–1946*. Édition par Pascal MERCIER et Cormel MEDER. Luxembourg: Publications Nationales, 2000, 697 pp.
- 17) Voir Charles Du Bos, *Journal 1921–1923*, Paris: Corrêa, 1946, pp. 161–179.

Lettre inédite d'André Gide à Paul Desjardins

21 juillet [19]22.

Cher ami

Je reçois à l'instant une dépêche de Jean S[chlumberger] me priant de vous envoyer aussitôt diverses adresses, que je croyais vous avoir données avant mon départ de Paris. Je vous les donne en hâte, espérant que notre séparation ne va pas amener un retard préjudiciable à la réussite du grand meeting.

Rainer Maria Rilke était il y a un mois au

Château de Muzot près Sierre Valais Suisse
s'il l'a quitté, il aura dû y laisser sa nouvelle adresse.

Ivan Bounine – je ne connais pas son adresse ; mais

Bossard 43 rue Madame
ferait suivre.

Middleton Murry

Hôtel Majestic (?) rue Blaise Desgoffe (rue de Rennes)
([en note] pas bien sûr du nom de l'hôtel – mais il n'y en a qu'un.
Peut-être vaudrait-il mieux mettre
Grand Hôtel de la rue Blaise Desgoffe)

Madame Simon Bussy

chez Lady Strachey 51 Gordon Square London

M. Bounine (et Madame)

Mid. Murry (et Madame)

M^{rs} Bussy – ont accepté ferme – c'est-à-dire qu'ils n'attendent plus qu'une confirmation de vous, maintenant l'invitation et précisant la date et l'heure. J'ai dit (ou fait dire) à Bounine qu'il aurait à se considérer comme *invité* (not paying guest).

Rilke également – mais il n'a pas encore donné de réponse ferme ; son acceptation, ainsi que celle de Curtius dépendait de l'amendement apporté au programme.

Jaloux non plus n'a pas répondu de façon ferme ; il semblait très désireux d'accepter et devait me récrire. Il serait opportun de le relancer. Son adresse... rue de Valois – mais je ne sais plus le N°. Son éditeur

(un des ses éditeurs) ferait suivre. De toute manière, Madame Jaloux ne pouvait venir.

J'ai quitté les Martin du Gard il y a 8 jours. Roger M. d. G. se promettait de venir. Mais, à lui comme aux autres, il serait bon d'envoyer, il me semble, une invitation précise et définitive.

(Le Mée près Melun Seine-et-Marne)

Jean S[*chlumberger*] vous aura redit de ma part que Madame Mayrisch et Mademoiselle M[*arie*] Delcourt attendaient également cette invitation dernière – et moi-même, comme tous ceux qui se proposent de venir, aurions désir d'être fixés sur le jour et l'heure où vous attendez.

Madame Van Rysselberghe

et Mademoiselle " " chez qui je suis présentement

(Bastide Franco Brignoles Var)

viendront également très volontiers, ainsi que je vous le disais à Paris – et leur présence me paraît très souhaitable comme agents de liaison (excusez la phrase incorrecte).

Une lettre de Galsworthy que je recevais récemment, m'a un peu étonné; il y dit son désir de me rencontrer «à Londres ou à Paris»... n'est-il pas certain de venir? Je croyais que c'était chose entendue...

La N.R.F. a annoncé par inadvertance la présence de Bennett et de L[*ytton*] Strachey – mais je vous ai dit, n'est-ce pas, qu'ils s'étaient tous deux récusés.

Au revoir cher ami. Quelle joie de pouvoir vous dire: à bientôt. Veuillez présenter mes hommages à Madame Desjardins et me croire votre bien dévoué

André Gide.

Thibaudet vous aura dit sans doute son désir d'arriver à Pontigny, s'il est possible et pas indiscret, deux jours avant la 3^e décade de manière à goûter un peu de la nôtre.